第 5 回研究会 2017 年 12 月 16 日

スパルタンイングリッシュ第 5 回の発表者は、弘前市立第三中学校の寺山陽子先生です。寺山先生は、弘前市英語教育調査研究委員として、授業研究実践において、リーダー的な役割を果たしておられる上、スパルタンイングリッシュ発足当初から、参加されている非常に熱心な先生です。まさに満を持しての授業公開となりました。公開していただいた授業は、弘前市の英語教育調査研究委員の公開授業の内容です。

弘前市の中学校の教員、ALT の他に、青森市からの参加もあり、合計 18 名の参加者による授業検討がなされました。

授業者から

- これまでいろいろな先生の授業を見て、授業の改善を行っている。ある大学の先生が、授業の始めに、何の意味も、つながりもなく、曜日・日付を聞くのはダメだと言っているので、Fun Fact と名付けて、その日に起こったことを紹介するようにしている。ちなみに Fun Fact という名前は、ALT に考えてもらった。
- またルーティーンワークとして Small Talk を行っている。その際には、教師と生徒だけではなく、生徒同士の会話も取り入れている。
- 実現が難しいが、なるべくオールイングリッシュで授業を行うようにしている。
- 今回の授業では、手紙を読んでリーディング、ビデオメッセージを聞くことでリスニング、返事を書くことでライティングと技能を関連付けながら授業を行うことを意識した。

当日の流れと感想

導入

(1) Greeting

(2) Small Talk：What time do you go to bed?について、教師と生徒／生徒同士で質問し合う

(3) Fun Fact：Halloween Eve について生徒とインタラクションしながら英語で説明する

(4) Magic Words：教師が発音した英単語を聞いて、辞書を引いて意味を調べる（本時の場合は after）

寺山先生は、時間にして 10 分弱の時間で 4 つの活動をされています。これを可能にしているのは、研究協議でも何度も話題になった、「テンポの良さ」です。参加者から「あまりに早すぎて、生徒がついていけないのでは？」という意見が出たときに「3 時間もすれば、生徒は英語の授業っていうのはこういうものなのだと、あきらめるんです。」と発言されていたのが印象的でした。

- Small Talk の時に、生徒が即座に会話をしている。「はい、話して」と言われてすぐ動けるようにするにはどういう指導がこれまであったのか？

（授業者より）

5～6 時間 Q&A の訓練をしている。例えば、じゃんけんで勝った方が、質問を聞いて答える、返ってき

た答えについて、リアクションをとるという活動を行った。

- 自分は寺山先生の指導を受けたことがあって、辞書引きの活動が大好きだった。この活動を３年間やったことが、高校に行った後、大学に来ても、すごく役に立った。この活動をするときに、単語はどういう基準で選んでいるのか？

（授業者より）
ベーシックなものから選ぶ時もあるが、今回は、この後の授業で使うものを選んだ。

- 流れが速い。この速さに生徒が慣れるには、４月からどれくらい時間がかかるのか？

（授業者より）
生徒は３時間であきらめる。もうこれでやるしかないんだとなる。さらに、小学校の英語が役立っていると思う。耳がよくてしゃべれる子がたくさんいる。この状態になるまで、それほど時間がかからない。

- 活動を終えた子から座るシステムをとっている。この形にすると、早く座りたくて活動をおざなりにしてしまう危険性があるのではないか？特に、Small Talk では、早く終わらせるよりも、話を続けようとする方が大事なのではないか？

（授業者より）
がんばったら座れるという意図でやっている。生徒がしっかり話して理解できているかどうかは、今度の活動の様子を見て見取ることができる。

- Magic Words で、生徒が耳で聞いて、辞書を引けるようになるまでどれくらい時間がかかるのか？

（授業者より）
時々、フォニックスのような活動を行っている。また、Help each other.とすることで、上位の生徒が、「これは l じゃなくて r から始めるんだ！」というようにヒントを出すようになると、活動がしやすくなる。前任校では、小学校にお願いして、卒業記念で贈呈する英語の辞書を統一してもらっていた。今は、それができないが、生徒が持っている辞書が違っていても、活動ができないということではない。授業に関連した単語を選ぶこともあるが、「今日は、寒いね。じゃあ Blizzard！」というように選ぶこともある。

丹藤先生から
　テンポが速いのがいい。英語の授業は早さがないとダメ。授業を見ると、この内容だったら、自分だったら３０分でできるなと思うことがある。もちろん下位の子に配慮することも必要だが、ここはあくまで Warm-up の段階である。授業の後半でフォローアップすることはいくらでも可能である。
　Small Talk は機械的な会話になりがちである。今回の What time do you get up?という疑問文も、これに「on weekend」や「on Saturday」つけることで質問に意味を持たせることができる。このように生徒の活動に「思考・判断・表現」を持たせる工夫は、授業のどの段階においても可能である。

展開

(1) ALT からの「手紙を送ったら、読んでみてね」という内容のビデオレターを聞く

(2) 手紙を読んで内容理解

寺山先生は、英文の内容理解を英語で説明されています。こういうことをやると、「英語を習いたての中一に、英語で英語を説明するなんて無理に決まってる。→だから訳読式」のような短絡的な発想を堂々と発言される人がいますが、やり方によっては、十分可能であるということが分かります。素人ができるはずがないと思うことをやってのけるのがプロの技！

- ビデオレターを見せる前、手紙を読ませる前に、質問をするなどをして、聞かせるポイントや、読ませる目的などを示す必要があるのではないか？普段の授業では、リスニングのタスクをどのように与えているのか？

（授業者より）

聞かせる／読ませるポイント示すときと、ただ聞かせるときとは、半々くらい。今回は、学校の ALT なので、「聞いてみてね」くらいで活動を行ってみた。

丹藤先生から

この質問は、pre-reading、post-reading に関することと言える。本時であれば、手紙を読んで、その後に返事を書くので、writing が post-reading の活動となる。このように考えるべきは、ALT からのビデオレターを聞くということが、pre-reading としての機能を果たしているかどうかということになる。活動が、pre-reading のとして機能していれば、教師の指示や質問は不要である。特に本時は 3 時間目であるので、あっさりしていてもいいのではないだろうか？

- いつも学校に常駐している ALT から手紙が来て、それに返事を書くという一見不自然な場面設定にしたのはなぜか？

（授業者より）

校内研の授業でもあったので、ひとりで授業をする必要があったこと、ICT を使った授業を提案しなければならなかったこと、毎レッスンごとに ALT から手紙が来るという活動を継続していることが理由である。手紙という活動にしたのは、コミュニケーションへのこだわり。ひとり一人が目的をもって書くことをねらっている。

- 学校にいる ALT ではなく、ALT の友達などにすると、より自然な活動になると思う。

- ALT の先生が、アメリカの実態をグラフで示している。個人が手紙を書くのではなく、クラス全体の傾向を生徒がまとめて出すという活動があってもよいのではないか？

（授業者より）
全体の傾向は、生徒からの手紙を受け取った ALT がまとめることになっている。

丹藤先生から
　すばらしい視点である。例えば、このクラスの結果がどうなるのか予想させることを pre-reading の活動にするというアイディアもある。

展開２
(3) 返事を書く
(4) ペアで読み合いを行い、お互いに訂正して書き直す

　寺山先生は、グループを使って、生徒同士で教え合うことで、問題解決を図っていました。この形に生徒も慣れており、互いに気軽に教え合ったり、お互いの手紙を読み合ったりする様子が見られました。

- 生徒のライティングの結果が、金太郎あめのような、どれもみんな同じようなものでは、お互いに読み合うフィードバック活動が全然面白くない。生徒の英文にバリエーションはあるのか？

（授業者より）
中一なので大きなバリエーションはないが、できる生徒はいろいろなオリジナリティー出している。

- 大学の教科教育の先生に、評価規準をしっかり示し、共有することが大事だと何度も言われている。今回のライティングの時に規準が示されていないが、以前に同じような活動をするなどして、生徒は規準を理解して活動しているのか？

（授業者より）
今回は、内容を重視ている。最終的には ALT が生徒の英文を評価するようにしている。

丹藤先生から
　ねらいとして、どういうものが書ければ 100 点と示すことはしていないが、今回の授業では「何も見ないで文をかけること」がねらいと考えることができる。であるとするならば、もう少し手立てが必要である。書けない時の解決法（＝ストラテジー）を身に付けさせる指導が必要である。
　グループ活動の意味を考える必要もある。教え合うことが、そのまま「学び合い」や「対話的」とはならないことを認識しなければならない。例えば、できる子が、下位の子に一方的に情報を与えるのは、対話的とは呼べない。
　例えば、手紙に書く内容は 5 個にして、何を書くかグループで話し合って決めるとすると、他の班は違うものを選ぶかもしれない。ここに「判断」が入るし、こうすることで、決まりきった内容に手紙が

なることもない。まさに集団で勉強した意味がある。

➢ 作業が習慣化されていて、慣れている様子が見られる。この活動の効果はどのようなものがあるか？（授業者より）

まずは、入試やテストで、自由英作文に未記入がいなくなる。疑問文にある表現を使って、答えの文を作れるようになる。(Do you walk to school or go to school by bus?を使って、I walk to school.と答えられるようになる)

参加者からの全体的な感想

- 普段の組み立てが大事。All English の授業ができるようになりたい。
- 自分の授業も、今の 1.3 倍くらいの密度にしなければいけないと思った。下位の生徒の心配はあるが、数をこなして慣れさせることが大事だと思った。
- ライティングの授業では、ついつい生徒の質問に丁寧に答えてしまう。準備をしてしっかり仕込むことと、ほったらかすことのメリハリが大事だと思う。任せるところは生徒に任せて、やらせてみるように心がけたい。
- オールイングリッシュ、リアルイングリッシュが勉強になった。そうは思っていても、ついつい日本語を使ってしまう。トレーニングをで慣れることでちょっとずつ分かっていく「積み上げ」の重要さを感じた。
- たくさん参考になった。オールイングリッシュで、さらにテンポよく進めるには、「今日の授業ではこれを教える」というポイントが明確であることと、長期的なビジョンがあることが大事なのだと思う。
- 「タネをまく」という表現が印象的であった。寺山先生の授業には、ここまで生徒に到達してほしいという思いがある。参考にしたい。
- 耳で聞いた単語を辞書で引く活動は高校でも役に立つと思う。
- 子どもとの信頼関係を感じる授業であった。4 月から 1 年経っていないのにここまでの授業ができる。自分は小学校教員志望であるので、ああいう授業についていける子どもを小学校で育てたい。
- どれだけ入念に準備しても、授業は思った通りに進まない苦労がある。寺山先生の授業にはそれがないのは、根底に普段の継続、ALT との信頼関係があると感じた。
- 慣れの積み重ねと、生徒に預けることを怖がらないことが大事なのだと思う。
- 楽しい研究会だった。英語はやはり知的な実技教科なのだと思った。話して、立ったり座ったりして、書くことをたくさんやらないと力がつかない。
- Fun Fact と ALT からの手紙が来る活動を、ぜひやってみたい。

丹藤先生から

ライティングの評価について、先生ががんばっていろいろ書いて添削しても、生徒が何を直しているのか「気づき」がないと意味がない。そのためには「観点」をしっかり示すこと。ライティングの添削は非

常に時間と手間がかかる作業。今回であれば、通学方法と放課後の活動だけについて添削するというように、フォーカスすることもあり得る。エラーコレクションは「気づき」を促すことが肝要である。

寺山先生の授業は、レベルが高い授業である。テンポの良さ、指導の徹底、さらに「Belief」＝「揺るがない信念」がある。英語の教師が一人前になるには 10 年かかるといわれている。研修会に参加する、授業を見てもらう、など地道に努力するしかない。

おわりに

寺山先生の授業を見て、僕が思うのは「生徒が楽しそうにしている」ということです。この点は誤解されやすくて、楽しいだけのゲームを導入したり、ウケをねらった発言をすることが「楽しい」と思われているなと感じることが多々あります。でも、本当に楽しさは、生徒が「自分ができるようになっている」「力がついている」というように成長を実感させられる授業にしかありえないと思います。一見すると難しくてレベルが高いような活動でも、生徒が前向きに寺山先生についてくるのは、授業中に成功体験を感じる場面がたくさんあるからに他ならないと思います。「主体的な」がキーワードに挙げられることが多いですが、生徒の主体性は寺山先生のような授業でこそ育つのだと思います。

（文責　佐藤）